

提 言 書

楽しく学びつながる生涯学習
～異世代交流をとおして～

平成28年10月11日
榛東村社会教育委員会議

目次

1 はじめに

2 異世代交流における現状と課題

(1) 異世代交流の今日の実態

(2) 榛東村における異世代交流の今日の実態

(3) 生涯学習班事業による異世代交流の実態

3 提言

提言 1 村ぐるみの交流を通して子どもを育てる。

(1) 村ぐるみであいさつ運動をして、異世代へのコミュニケーションを広げる。

(2) 異世代が参加できるような行事・イベントや教室を行い交流を深める。

提言 2 地域の伝統文化の継承を通して交流する。

(1) 榛東村に受け継がれている伝統文化の果たしてきた役割を認識する機会を積極的に設け、伝統文化を通じて地域の人々と交流を深め郷土を大切に作る心を育む。

4 おわりに

1 はじめに

「生涯学習」とは、私たちが生きがいのある充実した生活を送るために、自分が学びたいことを、自分に合わせた手段や方法を自ら選んで、「いつでも、どこでも、なんでも」自由に、楽しく、生涯にわたって学んでいくことである。また、「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価されるような社会」をめざそうという考え方を表している。以上のように「生涯学習」とは間口が広く、どこから切り込んでいくのか的が絞りにくい面がある。そこで、今回は「楽しく学びつながる生涯学習」をメインテーマにして、「異世代交流をとおして」をサブテーマとした。

榛東村は榛名山麓に位置し、豊かな自然や、歴史と文化・伝統に恵まれている。そのような地域環境の中で、年齢に関係なく、大人と子どもが共に学び、語り、活動できる地域づくりを行うことは、たいへん意義のあることだと考える。

今回の提言により、子どもたちは学校生活以外の場面で様々な地域やそこに住む人々との交流を通じて人間関係を広げるとともに、異なる文化や社会、価値観を理解・尊重し、普段出会う機会の少ない地域の人々と共に協力して何かを成し遂げる場や機会を得ることができることを望む。

2 異世代交流における現状と課題

(1) 異世代交流の今日の実態

現代の日本の家族は少子高齢化が進んだことなども影響し、核家族が多くなった。さらに各家庭における子どもの数も減少し、家庭内での人間関係が単純化してきている。

現代の子どもたちは身近に異世代間でのかかわりをもつことが難しくなった。祖父母世代の人と日常的にかかわっている子どもは少なくなり、かつてのようにそのかかわりの中から学び、知識を得るという機会も減っている。子どもは兄弟、姉妹とのかかわりにおいて、年上の者を見て学んだり、直接何かを教わる。年下の者とかかわることで自分の普段とは違った面を見つけられたり、責任感を芽生えさせるきっかけを得られたりする。しかし今日、子どもたちはこのようなかかわりですらなかなかできなくなっている。

さらに、家庭以外の地域や社会においても世代間での交流機会は減ってきている。地域における人間関係が以前に比べて希薄になり、子どもたちが地域の人たちとかかわるという機会もあまり得られなくなった。家の内でも外でも、子どもたちの周りの人間関係はとても狭く限られたものになってしまっている。

(2) 榛東村における異世代交流の今日の実態

① 子ども・子育て支援に関するニーズ調査報告書より抜粋

※平成 26 年 6 月榛東村役場子育て長寿支援課において就学前児童と就学児童の保護者を対象にアンケート調査を行い、その結果を報告したもの。

ア 子どものきょうだい構成について

- ・就学前、小学生ともに、「2 人」が最も多い。

イ 子どもの子育てに日常的に関わっている人（施設）

- ・就学前では、「父母ともに」が最も多く、次いで「保育所」、「母親」
- ・小学生では、「父母ともに」が最も多く、次いで「母親」、「祖父母」

ウ 日頃、子どもをみてもらえる人がいるか

- ・就学前、小学生ともに「緊急時や用事の際には祖父母等の親族にみてもらえる」が最も多く、次いで「日常的に祖父母等の親族にみてもらえる」

エ 母親の就労状況

- ・就学前では、「パートタイム、アルバイト等」が最も多く、次いで「以前は就労していたが、現在は就労していない」、「フルタイム」

- ・小学生では、「パートタイム、アルバイト等」が最も多く、次いで「フルタイム」、「以前は就労していたが、現在は就労していない」
- オ 母親の就労日数
 - ・就学前、小学生ともに、「5日」が最も多く、次いで「4日」、「6日」
- カ 父親の就労状況
 - ・就学前、小学生ともに、「フルタイム」、次いで「パートタイム、アルバイト」
- キ 父親の就労日数
 - ・就学前、小学生ともに、「5日」が最も多く、次いで「6日」
- ク 子どもの放課後の過ごし方
 - ・就学前では「自宅」が最も多く、次いで「放課後児童クラブ」、「習い事・塾」
 - ・小学生では「自宅」が最も多く、次いで「習い事・塾」、「放課後児童クラブ」
- ケ 榛東村に住んでいる年数
 - ・就学前では、「5年以上～10年未満」が最も多く、次いで「10年以上」、「1年以上～3年未満」
 - ・小学生では、「10年以上」が最も多く、次いで「5年以上～10年未満」、「3年以上～5年未満」

② 平成22年国勢調査より

- ・榛東村の一般世帯数 4, 609世帯
- ・榛東村の核家族世帯数 2, 900世帯

平成22年国勢調査及び「子ども・子育て支援に関するニーズ調査報告書」（平成26年）から

本村の核家族世帯は、一般世帯数のうち過半数を占めている。

また、各世帯の子どもは2人きょうだいがもっとも多い。親の就労状況では、母は「パートタイム、アルバイト」が多く、父は「フルタイム」が多いことから、親は仕事で家を留守にすることが多いと考えられる。

また、就労日数については、母及び父ともに「5日」が最も多いことから、週のほとんどが勤務日になっていることが考えられる。

子どもの子育てについては、「父母ともに」関わっているが最も多い。また、緊急時や用事の際には祖父母等の親族に子どもをみてもらえる環境にある人が最も多い。

子どもの放課後の過ごし方については、自宅が最も多い。

③ まとめ(榛東村における放課後の子どもの過ごし方)

以上のことから、週のほとんどの日は親が仕事をしており、祖父母も子どもを日常的にみられる状況とはいえない。さらに、核家族化が進行する中、子どもは放課後の時間を自宅で過ごしており、日常生活の中で、異世代の人々と交流できる機会は非常に限られていると考えられる。

(3)生涯学習班事業による異世代交流の実態

【地域社会教育活動】

①放課後子ども教室の実施について

ア 対象・参加児童数

- ・対象：1～2年生の希望者
- ・申込者数：北小 69名、南小 69名 各校とも2グループに分け実施

イ 放課後活動サポーター登録数 23名

- ・参加児童の出席確認、宿題、遊び実施のサポート、教室終了後、学童保育在籍児童を送り届ける。(北小3ヶ所、南小1ヶ所)

②内容

- ・宿題と昔あそび、論語教室(南小のみ) 合計約1時間、月1～2回程度。

③成果と課題

- ・H27放課後子ども教室では、地域の大人の指導の下で子どもたちが宿題をしたり昔あそびで遊んだりして過ごし、参加した子どもたちからは好評であった。
- ・H27放課後子ども教室参加児童の保護者アンケートより、子どもが家庭や地域で高齢者と接する環境にない家庭が多く、そのような環境での子育てに不安がある保護者がいることがわかった。
- ・1時間の中で宿題とあそびを行うので、高齢者と子どもがゆったりとした雰囲気ですごす時間を取ることが難しい。
- ・集合、着席などの統制を取ることが難しいことがあり、高齢のボランティアの方々にとって、活動の中心となって指揮をとることは負担が大きいように感じる。
- ・子どもたちにはあいさつや敬語、感謝の気持ちを表すなど、地域の人に礼節のある態度がとれるようになって欲しいと思い、形からでも取り組んでいる。
- ・学校内で放課後に行う取り組みのほかにボランティアの方々の発案による郷土食づくりや自然体験などの活動も土・日に実

施している。

【家庭教育支援】

①しんとうママフェスについて

年1回の地域ぐるみの子育て応援イベント。

実行委員の思い「お母さんたちが楽しみながら関れるイベントにしたい。子どもたちは役場で思いっきり遊んで、榛東村を好きになって欲しい。」

②しんとうママフェス実行委員による実施事業

- ・ しんとうママフェス（子育て支援イベント）9月役場
- ・ 通園・通学バッグ・袋物作り（仲間作り）3月小学校家庭科室
- ・ 文部科学省「家庭教育支援チーム」への登録

③しんとうママフェスにおける異世代交流

子育てに関わる人達の輪を広げる活動として様々な年齢層の人々が関わりをもち交流する。乳幼児・保護者と地域のお母さんたちがイベント、ブース、実行委員企画講習会等に参加することで地域ぐるみでお母さんたちを支援する。また、子どもたちと中学生・大学生ボランティアによるあそびコーナーによりお兄さんお姉さんに遊んでもらう楽しさを改めて実感する。子育て中の保護者は地域の若者の活動を見ることで、子どもの将来像につながる可能性を認識する。中学生や大学生はイベントスタッフとしての社会的経験を積むことで自己有用感の確認をする。さらに、ブース出店者は地域の商店やお母さんたち等による出店として、子育て世帯が楽しめる商品の制作・価格設定をする。そして、地域住民がイベントを楽しむ様々な年齢層の姿を見ることで交流の幅を広げていく。

④成果と課題

- ・ しんとうママフェスは上記のような要素が盛り込まれた企画となっており、地域全体で子育てを見守り、子育てに関わる人達の輪を広げる活動につながっている。
- ・ 運営側スタッフの参加促進が事業継続のために必要。
- ・ 教育委員会部局のみならず村長部局や地域との連携により、より幅広い方面からの子育て支援体制を周知する事ができる。

【青少年健全育成】

①親子蕎麦づくり体験

小学生と保護者を対象に募集し親子で体験。講師となる青少年育成推進委員さんと交流を図りながら、土づくり・種まき・土寄せ・刈り入れ脱穀・乾燥、製粉・蕎麦打ち体験などの体験

学習を行う。

②成果と課題

毎年実施しているのでリピーターが増えてきた。親子で栽培・収穫・調理という「食と農」にふれあえることを実感。親子の活動だけではなく別の親子との交流も深まった。リピーターに限らず広く参加者を募りたい。

【スポーツ振興事業】

①しんとうレクリエーションスポーツフェスタ

スポーツ推進委員主催の事業であり小中学生を対象とした内容であるが、村内各戸への回覧を通して一般の方にも募集をかけた。スポーツのルール説明や指導については推進委員が行い、安全に楽しく運動できる場を提供した。また、小中学生と一緒にスポーツをする機会となり交流を深ることができた。

②ノルディックウォーキング

秋に榛東村内の文化財を巡るコースを設定する。募集は幅広い年齢層を対象としてウォーキングをしながら交流を深める目的で行う予定。

③成果と課題

小学校と中学校がレクリエーションを通して交流する機会はないことから、スポーツを通して交流する場をつくることの意義があった。今年度は中学校の参加人数が多かったが小学生の参加の募り方を考えたり内容も検討していくことで、魅力ある交流の場としたい。

ノルディックウォーキングは回を重ねるごとに工夫を加え、より多くの村民の方が参加できる教室としたい。

【社会人権教育】

①夏休み人権ビデオ視聴会（村内すべての行政区で実施）

- ・ビデオ視聴会と世代間交流を組み合わせで開催（長寿会が子どもたちに竹馬・竹とんぼ作りと遊び方の指導、流しそうめんを行った）
- ・夏祭り行事の一環としてビデオ視聴を行っている。（地域の大人や子どもが多勢集まる場での啓発活動）
- ・伝統行事を長寿会と子どもたちで行った後、ビデオ視聴会を行った。

②成果と課題

各地域の行事と絡めて視聴会を行っているので、幅広い年齢層の方が集まりやすい。地域の子どもたちや大人たち

とビデオ視聴することで、共に人権について考えることができた。

【耳飾り館・文化財】

①耳飾り館ふるさと学芸員の活動

地域の文化財を調査・研究し、広く一般に普及させる活動を主旨としている会で、平成 27 年度は小学校からの要請に応え 3 年生の社会科の学習に協力を行った。

ア 昔のくらし

村内で使用されていた昔の道具（民具）の展示解説（どのように使用した道具か）を耳飾り館で行った。子どもたちに語りかけながら、石板に字を書いたり戦前の教科書を読んでみせたりした。石臼の展示場所では 70 歳代の会員が粉をひいて実演した。

イ 文化財見学ガイド

南小学校周辺の史跡・寺社の見学に同行し、地域の文化財について解説を行った。（孝経の碑・聖宮神社・宮昌寺）神社では神楽保存会にも所属している会員により、篠笛の実演も行われた。

②成果と課題

地域の文化財に子どもたちが触れる機会は少ないが、今回のように人を介した学習で生き生きとした歴史を学ぶことができたのではないか。また、地域の歴史を大切にして学び伝える活動を行っている大人の存在に気づくことができたのではないか。

南小 3 年生の授業の一環として行われた活動であり、教師による事前指導により、地域の文化財を捉える考え方や、歴史ボランティアであるふるさと学芸員についての説明が、子どもたちに充分になされていたため、良い成果を生むことができたと感じる。

3 提言

提言 1 村ぐるみの交流を通して子どもを育てる。

- (1) 村ぐるみであいさつ運動をして、異世代へのコミュニケーションを広げよう。

本村では、あいさつについての取り組みをそれぞれの小中学校で進めている。校内を問わず地域の人々に率先してあいさつができる児童生徒もいる。しかし、地域の人とすれ違っても、ためらってしまい、お互いがあいさつをしない場面も見受けられる。大人は子どもたちからのあいさつを待っているだけでなく、率先垂範してあいさつを交わせるようにしていくことで、地域の子どもは地域が育てる意識づくりや地域の人達とのつながりが広がっていくものと考ええる。

その実現のため、次の提言をする。

- ① 村ぐるみのあいさつ運動を行う。

- 学校のあいさつ運動と同じ期間として、村全体で統一した期間を定めて取り組む。
- あいさつ運動は広報、区長便覧や防災無線等で啓発をする。

- (2) 異世代が参加できるような行事・イベントや教室を行い交流を深めよう。

地域社会教育活動である放課後子ども教室は地域のボランティアの方々と共に、小学校低学年と幅広い年齢層の方が遊びを通して交流をすることができている。しんとうママフェスは、回を重ねるごとに様々な企画と多方面の方々の協力により来場者数千人を超える異世代交流イベントとなっている。このような事業を継続することでより楽しく多くの人々とつながっていくと考える。

今後はスポーツ振興事業や青少年健全育成事業などで行われている異世代交流を継続すると共に、新たな取り組みを企画することで交流する機会を増やせるのではないかと考える。

その実現のため、次の提言をする。

- ① 既存の異世代交流事業の推進をする。

- 放課後子ども教室における予算の増額や放課後活動サポーターの確保。
- しんとうママフェスの継続。スタッフの募集や学生への参加要請など異年齢層の参加の拡大。

②異世代のスポーツ交流の機会を増やす。

- スポーツ推進委員の積極的な関わりとレクリエーションスポーツフェスタの継続。
- グランドゴルフによる高齢者と子どもたちの交流。
- スポーツ少年団、体育協会、総合スポーツクラブ、部活動などの各種スポーツ団体との交流。

提言 2 地域の伝統文化の継承を通して交流する。

- (1) 榛東村に受け継がれている伝統文化の果たしてきた役割を認識する機会を積極的に設け、伝統文化を通じて地域の人々と交流を深め郷土を大切にすることを育む。

それぞれの地域で伝承されている固有の文化に親しむことは子どもたちの心に郷土愛を育むことにつながると考える。しかし、時代の変遷により伝統文化そのものを知らなかったり、伝承者が不足したりしているのが現状です。地域の大人たちが守り伝えている伝統文化の歴史的背景を含めた理解や継承に次世代を担う子どもたちが関わりを持つことは、豊かな人間性を育み、生きる力になっていくものだと考える。

その実現のため、次の提言をする。

①伝統文化の情報収集と情報の発信。

- 情報の発信として、獅子舞・太々神楽など伝統芸能の公演スケジュールを広報やホームページへ掲載、伝統文化カレンダーを作成するなど、行われている場所や日時、さらには伝統芸能の意味も紹介する。

②伝統文化の発表をする機会の創出。

- 学校での巡回発表、文化発表会での披露、史跡巡りツアー、百万遍など固有の伝統行事の紹介。

③積極的に伝統文化を受け継ぐ人材の育成。

- 継承に係る人的・物的支援策の推進。

4 おわりに

私たち榛東村社会教育委員は任期期間の 1 年目である平成 27 年度には中部地区社会教育研究集会において「地域での子育て～放課後の子どもの居場所づくり～」をテーマに事例発表を行いました。また、2 年目に向けて提言のテーマを決め、平成 28 年度は具体的な提言内容について話し合い、活動を進めてきました。

まず、提言テーマの共通理解を行い、現在の生涯学習における異世代交流の実態及び成果と課題を検討しました。また、課題に対する改善策を考え、提言へとつなげていきました。社会教育委員一人ひとりのアイディアをKJ法やブレインストーミングなどを通して洗い出し、具体的な取り組みと活動を探り、話し合いの結果をこのような形でまとめました。

今回の提言をご理解いただくとともに、教育委員会としても積極的に取り組まれるよう要望いたします。

今後とも社会教育委員の活動に対しまして、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。